

すずめの学校

松井 とし

「これまではすずめの学校でしたけれど、これからはめだかの学校です。」ある講演会の冒頭、幼児教育一筋の長い経験を生かして今は保育者養成の短大で教鞭を取っていると、いうその教授はこのように話し始めた。

すずめの学校の先生は「鞭をふりふりチイパッパ」である。これまで、幼稚園の先生は、飴と鞭を使い分け、幼い子どもを相手に学校ごっこひな型を演ずるもの、とイメージする人たちがいたとしても、教育要領が改訂され四年も経過し、しかも子どもの身近にあって共に生活をつくってきたであろう人のたとえに「すずめの学校」が使われたことを私はとても不快に思った。聞くところによると、従来の教育をすずめの学校にたとえ、「誰が生徒か、先生か」というところをとらえてこれからの教育をめだかの学校にたとえたのは、小学校の生活科が導入された頃にそのあり方を指導する人たちだったらしい。これが

らの幼稚園教育の真髓を語ろうという時に、他の領域の人が使ったこのようなたとえを借りなければならぬところがいかにも悲しい。

またこのようなこともあった。ある大学附属幼稚園主催のシンポジウムの席で、若い臨床心理学者が次のような質問をした。「幼稚園教育は難しい。たとえば、けんかの場面で先生が仲裁に入る時と、子どもたちに任せて黙って成行きを見守っている場面がある。同じような二つの場面で先生のかかわり方が違うのはなぜか？」それに対して、やはりその幼稚園での長い保育実践の後、短大で保育者養成をしているというベテラン教授は「それは時と場合によって違うので、一概には言えない」とだけ答えた。すると「残念ながらやっぱり幼稚園教育は経験と勘によって成り立つのか、と思わざるを得ない」と質問者。このかみ合わないやりとりを聞いていて、幼稚園界が抱えている問題に心が重くなった。保育の瞬間々々には無意識のレベルで行動することが多いが、保育者は省察することによって幼児理解を深めている。自身の行為の源に迫っていくこの時の振り返りが、これからの幼稚園教育の質を高めていく上で不可欠なのである。借り物ではなく、仲間同士でうなずき合うのでもなく、実践の中から真の専門性を紡ぎ出し、他の領域の人たちにも理解されるように表していくことは難しいが、これからは避けられない課題である。

(元・幼稚園教諭)